

## 「北極圏旅行記 2017 (1)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

いよいよ北極圏旅行に出発した。今日は日航機のヘルシンキ直行便で、北欧入りとなる。ヘルシンキは地理的に日本から近い。直行便のある都市では、モスクワを除けば、欧州の空港の中で日本から一番近い。ロンドン行きは12時間近くかかるが、ヘルシンキまでは10時間以下で着ける。



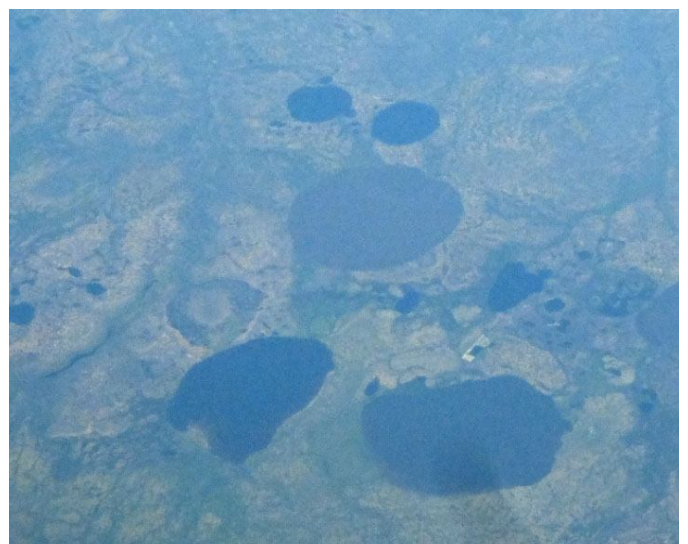
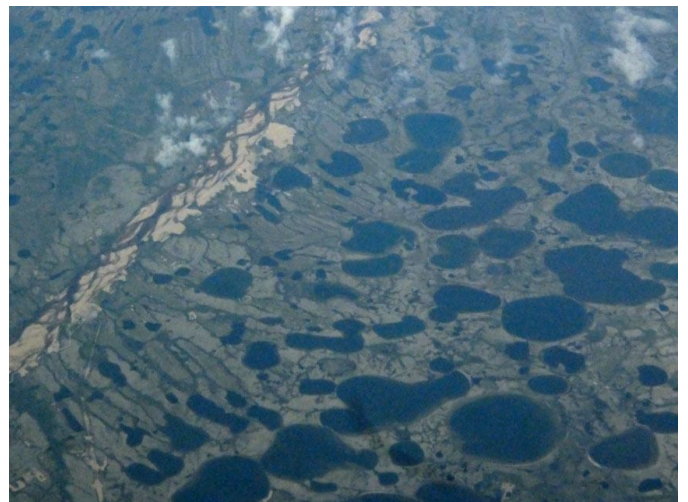
私はいつもシベリア上空からの地形の観察を楽しみにしている。今回は右の窓際だったので、もう100枚以上写真を撮った。上は、蛇行した川で、白く見えるところは、砂地(河原)である。



名前もないような細い川ばかりだったが、しばらく見ていると、大きな川を横切った。

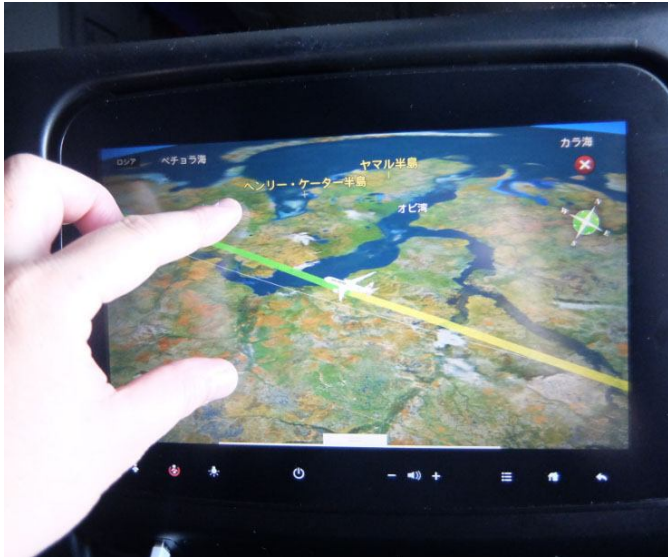


この川は「ブル川」という川で、オビ湾という、シベリアの内陸まで食い込んだ、名が細い湾に注ぐ川の一つである。このあたりは最下流で、ほとんど高低差がない。流れとは別に、大小の湖が点在し、モザイク模様のようにになっている。



不思議なことに、丸い湖が多い。自然の形には、必

ず理由がある。こうした高低差のない土地では、湖の形状を決める要素が何もなく、結果的に、自然界で最も安定した「円」という形状に落ち着くのだろう。まるでクレーターに水がかまったようである。よく見ると、以前円形だった湖が干からびて（或いは高層化して）丸い草地になっているところも見られた。

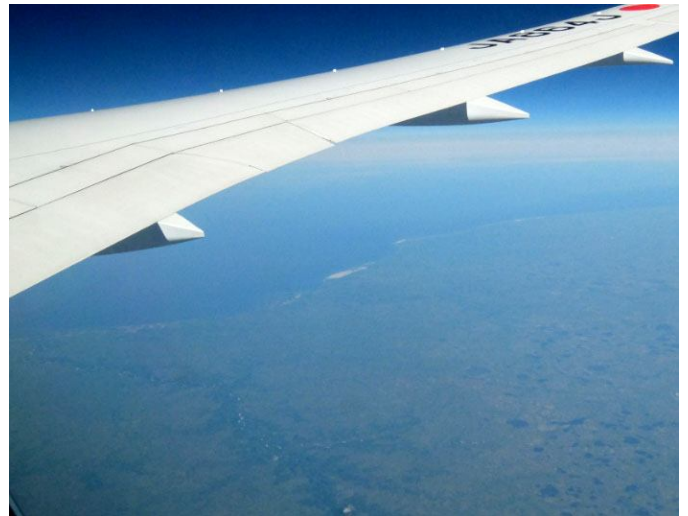


日航機（B787型）には、座席の前に大型のモニターがある。私は映画2本、交響曲1曲、それにルパン三世の電子漫画を見た。飛行機の経路、現在位置も詳しく表示され、タッチパネルで自由に視点や倍率を変えられる。機窓から地形の研究をする者にとっては、大変ありがたい。



成田もヘルシンキも北極圏ではないが、飛行機はオビ湾付近で、一旦北極圏に入る。川はどれも、激しく蛇行し、おびただしい数の河跡湖（三日月湖）が見える。シベリアを流れる河川は、非常に特殊な環境に置かれている。上流部が南、下流部が北に位置し、河口は北極海に注ぐことになる。冬は全面結氷し、しかも

南（上流）から解氷する（これを「大解氷」という）ので、春～夏に行き場を失った水があふれ出し、大濫乱を起こすことになる。恐らく毎年流路を変え、このような複雑な形状になるのだろう。



機窓遠くに、海が見えてきた。有名な「オビ湾」である。地図で見ると狭くフィヨルドのように見えるが、実際に見ると、非常に広い海である。



上は、オビ湾付近の航空写真である。Aのイタリア半島のような形の湾が「オビ湾」、Bが写真に写っていた「ブル川」、Cが北極海の一部の「カラ海」、Dが北極海に浮かぶ「ノバヤゼムーリャ」である。Aのオビ湾は、湾口から湾奥までが約1000km、幅も50km前後あり、巨大な湾とわかる。

明らかに「フィヨルド」ではない。どうしてこのような長大な湾が形成されたのか、ちょっとわからない。私は子どもの頃から地図を見るのが好きだった。小学校の時に配られた地図帳を見た時も、このオビ湾が気になって仕方なかった。一度、地上から見てみたいが、鉄道も道路もなく、特に凍土が融ける夏の間は、通行が非常に困難だろう。



ヘルシンキ到着前に出た軽食。今日はモスバーガーの「ライス・バーガー」と「サラダ」と、なぜか「ポテコ」なかなかおいしかった。同じ路線にフィンランド航空の飛行機も飛んでいるので、乗り比べると食事や設備がちがっていて面白い。



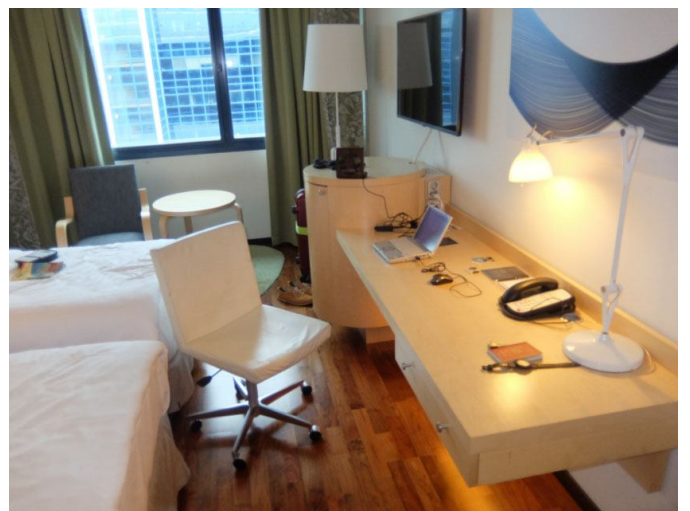
着陸態勢に入り、機が右に旋回すると、フィンランド湾が見えた。フィンランド湾は小さな島が多く、非常に美しい。



成田からわずか9時間25分で、ヘルシンキ・バンター国際空港に到着した。さすがにフィンランド航空の飛行機ばかりである。機を降りた瞬間、コーヒーと木が混ざったような香りがして、「ああ、北欧の空港に着いたな」と実感した。



いつもなら、ここで乗り換えて、ストックホルム、ルーレオ（スウェーデン）、ロバニエミ（フィンランド）まで一気に行ってしまおうのだが、今回は乗り換え便がとれず、空港近くにホテル（ヒルトン・エアポート）に1泊することにした。空港の近くというよりは、ほとんど空港の中である。子どもの言葉でいえば「空港の近くらへんのヒルトン」である。ターミナルを出ると、「↑HILTON」「↑ヒルトン」「↑昼豚」としつこいくらい案内があるので、迷うに迷いようがない。入国審査から5分でチェックインできた。



このホテルは、乗り換えの人専用みたいな性格なので、客室もごく普通のビジネスホテル風である。しかし立地が良く、機能的だ。明日は朝7時の便に乗るので、大変有難い。